

セビリヤより 佐藤生

にて打ち眺め候と同時に氏が如何に道路の改良に關し不斷の努力を拂ひつゝあるかは大に敬服いたし候

「スペイン」國皇帝「アルホンス」陛下は「ドン、カルロス」親王に祝電を寄せられて曰く「萬國道路會議の名を以て予に寄せられたる電報は予の深く満足し且つ感謝するものなり希くば會員諸氏へ予の親善の謝意を傳達せられん事を尙予は本會議の成功を切望すると共に此の詩趣に富む「アンデルシア」の舊都に於て會員諸氏を歓迎するの光榮を有したるは「スペイン」國民及「セビリヤ」市民と共に欣喜に堪へざる所なり

午後一時委員會終了午後五時より當市著名の寺院に於ける大「オルガン」奏演會に招きされ申候へ共馬の耳に念佛ならんと出席致さず後にて聞けば彼國の有名なる「オルガニスト」「ロバート、アルマント」氏神技を振り「スペイン」「フランス」「イタリー」「ドイツ」及「ルシア」の名高き名曲を奏したる由に有之幾分残念と思はぬにても無之候

會員諸氏は予の微忠を瀾み「セビリヤ」市の歡待を享受せらるゝと共に吾人人類の進歩繁榮上必要缺く可らざる本會の事業に對し益々努力せられん事を望む、終りに望み各國政府代表委員に對しては其の國家の隆盛を希ふと共に各位の愈々多幸ならん事を祈る

五月九日 昨日の約束もあり「サミエルセル」氏と相携え午前十時會場へと急ぎ申候委員會終了後午後一時と云ふに「ホテル」に歸りて午餐に「セビリヤ」獨特の料理をと注文致し候處「アロツツ、ア、ラバレンシアノ」とて米と雞肉と野菜とを「オリウ」油にて煮込みたるもの丁度日本の五目飯に似たる米料理を振舞はれ久々の日本式料理に舌鼓を打つことを得申候「スペイン」人の我等日本人に酷似せるは必ずしも其の風貌のみに無之其の氣風其の趣味も亦甚だ近似の點

五月八日 朝會場へと「ホテル」を出でん爲め鍵を張場に渡さんとせし際某老紳士の「君は日本の委員ならずや」と言葉かけたる者あり見れば此の人こそ道路改良の熱心家として知られ且つ日本人に多數の知己を有する米人「サミエルセル」氏ならんとは意外の地にて意外の人との邂逅を驚と喜しさと

時自動車を連ね會員一同郊外地「タブラダ」陸軍飛行場に參集いたし候見渡す限り茫莫たる野原に牛を放ちたると牛追師の木槍を携え騎馬にて之を追ひ回し之を倒す術に有之牛は三

段四段ともんどり打ちて轉れども別段恐れる様子もなく馬鹿
共何をするかと云はぬ計りの態度にて悠々と起き上る姿可
しくも亦面白く存候「ガーデン、パーチー」は之を辭し歸
途に就きたるは午後六時頃に御座候時に數百臺の自動車馬車
一時に歸路に押し寄せたる爲め其の混雜名狀すべからず自動
車を驅りながら二町余の門前に達するに一時間余を費したる
には嗚然たらざるを得ざる次第に御座候是れ全く關係者の交
通整理宜しきを得ざる結果にして彼等の間の抜けさ加減を嘲
笑したる者必ずしも神經過敏の日本人のみにても無之候

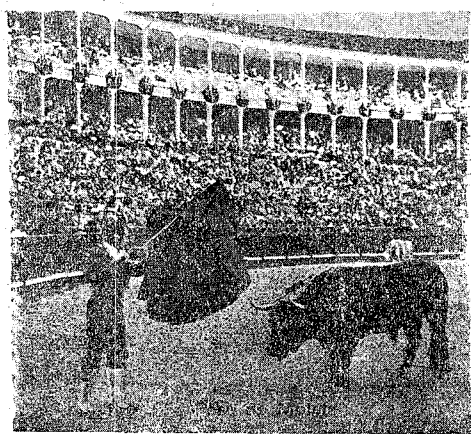
五月十日 午前中委員會出席午後四時より吾等會員の爲め
特に興行せられたる「スペイン」國獨特の闘牛を觀るの機會
を得申候例の如く「カルロス」親王、同妃、同王女喜臨の下に
全會員參集午後四時開始いたし候場は「セビリア」市東北隅
「ガルデキビル」河畔にあり恰も「ローマ」市の有名な
「コロッセオ」の如き圓形の石造建築にして外經百間余あり
中央直經七十間余の内庭は即ち闘牛の場所に當て一面赤黃青
に着色せる細砂にて「モザイク」模様に締め固められ其の外
側に高四尺余の木壁を繞し所々に避難口の設けあり之より約
六尺の外側には高六尺の堅固なる煉瓦壁あり從て木壁と煉瓦
壁とにて一つの環狀帶を形成す其の環狀帶には各所に仕切を

設け且つ各區域には闘牛場へ通じ得べき扉あり其の外側は即
ち石造階段に造られたる野天見物席に有之最後部は所謂「ム
アー」式建築の華麗なる屋根天井及高欄を以て裝られたる貴
賓及婦人席にて觀客數萬人を容るゝに足ると稱せられ誠に
驚べき建物に御座候此の日は特に「セビリア」市の紳士淑女
たちも少觀致候淑女たちは例の「スペイン」婦人特有の長き
肩掛けの五色絢爛たるものをのがじし高欄に け廣げ其の
美を争ひ其の富を誇れる様心憎けれど又得難き美觀と存候
廳て定刻に達するや數萬の觀客の拍手喝采裡に同國第一流
の闘牛師「ダントニオ、カネロ」氏以下數十名の闘牛師及び
其の助手たち或は騎馬に或は徒歩に錦繡の美服を身に纏ひ勢
揃ひの式を終れば「カンカン」と鳴り響く鐘の音を合圖に場
内へと追ひ出される一頭の猛牛は數分後の運命も知らず顔に
衆人環視をさきまり惡るけにさ迷へる姿愛らしく亦哀れに
存候 づ數名の助手は名々赤毛布の如きものを手にし交る交
る之を牛の眼前に突き着くれば牛は次第に其の野性を發揮し
遂には毛布に向つて猛烈し來るに至るもの之有斯くする事
數度にして牛の愈々昂奮するを俟ち闘牛師は長三尺の細長
き煙花の仕懸けたるを右手に持ち左手に赤布を携へて飛鳥の
如く突進し來る猛牛の正面に立ち塞ぎ衰れや闘牛師は猛牛の

只一撞きに殺されたらんかと思ひたるに飛び上りさま劔を牛の上肩に突き込みたる間髪を容れざる早術は誠に神巧精妙のものに有之候突き込むと同時に例の仕懸火花はけたたましき爆音を發する爲め牛は苦痛と驚きとに依り愈々荒れ狂えば闘牛師は巧に之を繰りて一本又一本と遂に

の筆舌の及ぶ所に無之候牛と闘牛師との格闘はまだしもながら猛牛をして馬を突き殺さしめるに至りては其慘酷さ言語同斷にて膚に粟なし手に汗を握る事屢々に御座候駿馬と猛牛との自發的格闘なれば未だ恕すべし常世の馬も斯くやと思は

十二本の劔を打ち終る頃は鮮血は流れて瀧の如く流石の猛牛も今は其苦痛に堪へ兼ね眼鼻口より流れ出す血潮は腥く怒れる眼の恐ろしさ此の世の事とも思はれず今や敵し難しと悲鳴を擧げて遁け迷ふ斯くと見たる闘牛師は一刀深く心臓を突て之を斃す、斃れたる牛は飾り立てられたる八頭立の馬に依て嚙嚼と鳴り響く音楽裡に場外へと運ばる之にて一段を終るものに御座候時としては闘牛師も奮進猛闘し來る猛牛を繰り兼ね難を避けざる可らざる場合有之斯る際は例の避難口に遁け隠る又猛牛の木壁を飛び越え環狀帯へ浸入する事ある時は例の仕切を閉じて場への扉を開き再び之を揚内に追ひ込むものに有之如何にしても斃さざれば止まぬものにて其の殘酷さ其の慘忍なる到底吾人



今の世にあらずもながの「アリビセ」の闘牛の哀れ

忍至極のものを何とて「スペイン」人は愛好するにや吾等は了解に苦しむと共に西洋文明の眞價を疑ふ者に候最早や見るに忍びず蒼皇退場致候されど動搖せる氣分は容易に靜まらず車を公園に驅り漸く心の平衡を得て夕景、ホテルに歸り申候

れたる瘡せ馬の右の眼を覆いたるに闘牛師は長き槍を携へて打ち誇り牛を右手に見て其の周圍を廻る一方闘牛助手は例の如く赤毛布にて牛を咬し猛襲し來る牛の角先に馬の横腹を適へば得たりと牛は之を突き破れば内臓は露出して地に達す即死すれば夫れにて止む然らざれば馬の斃れる迄再三再四之を繰返すものにて牛も亦數分を出でずして闘牛師の手に依て冥土の途連れとされるものに候嗚呼斯る殘